

2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18

櫻

品

上

別置

和装本

二双 14

7/6

1

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18

門二奴14
 跡 716
 卷 1-2



一席

本半々於先生まゝら
 心まゝらわら様のこと
 彼を辞まゝら人
 例の節無もよも云はら

目録
 一
 一

名木より名人蓮の心
はなはた

まはるる花に智恵

自然の語全



本邦草木之花可愛者
甚多矣然包櫻則不名直
曰花外天下之真花獨
櫻其石之著不似櫻の美
也其重主之如此其の花

富貴而艷又含函色花之
鍾其美冠諸花可知也吾
如菴先生嘗著梅品而辨
擗之品類大備矣然如桐
苦草瓣重瓣相交者稱呼

又係鄉人以此類甚難相辨
頃日鈍亦予介予從先生擗
以參考諸說為子雅者以
國字並寫花形示子愛花
者如名所櫻欲嗣之梓鈍亦

子維化回門其為事 公先生
餘意云身予維誅探觚遂
述其際為之序甲為之書
于思誅齋



怡顏齋櫻品叙

洛陽牡丹西蜀海棠日本櫻花單稱
花而不名之而人皆知其為牡丹為
海棠為櫻花其為人所貴重也可知
矣古人以_二依_一屈刺充漢土櫻桃者蓋
既誤其櫻桃是乃郁李之屬而與依
屈刺絕別殊不知我邦之櫻乃垂絲

海棠也前輩品評櫻花者皆不辨二物之異每引荆公景濂詩以證之何攷索之疎謬乎夫王宋二氏者皆不識我邦之櫻唯因人語傳聞其名漫寄題烏耳何足以為證哉而其詩所謂山櫻抱石映松枝者乃是櫻桃別種已非依屈刺讀者不察以為山中

櫻花誤也又或以系櫻充垂絲海棠亦偏也垂絲是依屈刺之總稱不独指系櫻予譜中既詳之今不復贅夫櫻花者天下之奇觀群芳之魁首所以與玉葉丹桂相伯仲上自王公下至士庶莫不愛賞者故古今之題詠載三七之撰凌雲經國之編者燦爛

溢乎細快異種代出奇花年新不知其幾百千種也景瀛所謂愛櫻日本盛於唐信哉夫三春之壯觀獨稱此花而其他則瑣々碎碎錦斷綉耳何足數哉然兼好法師偏賞單瓣山花却謂重葉者為異樣而劣何好尚之奇僻乎夫愛山者貴其高且大賞水者

愛其深而廣賞花者獨不然乎且無若富且麗非富麗則不足以稱花矣兼好獨愛短葉畱花者賤重葉富麗者此又不愛繁花耽綠陰之徒歟皆出於隱淪枯寂數奇之趣而非公平正大之心也不特花而已其好奇厭常悖人情以為高妙絕俗得物外之

趣而自不知覺其偏僻齷齪不通于
君子大雅之道無華夷與古今學者
往來有此弊可以自戒烏弔固非好
羨麗者只恐後生之勉無好之僻愛
故論及之弔豈好辨吾不得已也先
儒活所翁作譜凡十五種遺漏猶多
且有差謬予增添數十種勒為一冊

名曰櫻品此固非欽示大方只將其
時々繙攤吟翫常惋然坐對櫻衢之
觀平泉之賞云享保改元仲冬日恕
菴松玄達成章書于怡顏齋



櫻譜序

凡至尊者不名而知不特
帝王侯伯而已。於樹花亦
然。洛陽牡丹。西蜀海棠。日
本櫻是也。牡丹海棠皆各
有譜。余獨憾櫻之未也。信
筆作譜。亡慮十有五種。然

櫻
看一種。而小異者。有州郡
異名者。有因土壤而肥瘠
不同者。有隨寒暄而開落
異者。有隨雨暘而色香不
同者。則人必曰。不盡於此
譜。此惟記余所聞耳。觀荆
公山櫻詩。則中華不可謂

與茲華。茲華不可謂無香。
惟各有土宜。而與桐谷鹽
竈之類。故土人不堪玩者
耳。亦猶如此邦。與御衣黃
白舞青猊之屬。巖惟省謂。
宋諸賢集中。不得見之。嘗
質南遊者說云。彼方與此

種。則皆不之深考也。書以告同志者。丁亥春三月活所識

奈波道圓

羅山隨筆曰。日本稱櫻花曰花猶如洛陽牡丹。成都海棠也。中其詩文未多詠櫻花者。我朝文字禪者。取王荊公。山櫻抱石映松枝詩。以為是。雖然。余嘗見全芳備祖。櫻桃下載此詩。則與我朝所稱之花不同。然則中華詩

人所詠櫻花。是櫻桃也。古詩山櫻及花
欲燃。唐詩白櫻桃下紫綸巾。皆是歟

櫻辯

山崎闇齋敬義著

和國わくにもくもく専せん花はなとハと櫻さくら比ひふふりり櫻さくら比ひ
詠えいどどはは欽きん教きょうもも知しどどはは花はな神かみ代しろよりより
くくふふやや大おほ山やま祇ぎのの女むすめくくめめくくたたととりり
櫻さくらのの樹きはは浮うききままりりくくくく本もと花はな開ひらけけ耶や
昨きのうととりりはは白しろ皇み代しろ小こ乃の乃のんんとと履ついで中ちゆう天てん白しろ皇み

櫻池の御舟あそびに櫻花のたぬく
清不堂よ入り弘賞一内裡と若椽の
宮とく名付あふ平城天皇の御製衣

昔在幽巖下光華照四方忽逢攀
折客含笑百三陽送氣時多少垂
陰枝短長如何此一物擅羨九春
場

と空り凌雲集小出らり峯峨天皇
弘仁三歳二月小神泉苑小行幸とく
花は御後詩は作らぬめ玉ふたま
花の真の湛觴あはれとく文徳天皇に壽
元年小藤原良房の館に紅香ありと
櫻花は清浄詩は秋の御遊をうり多
天皇寛平七年神泉苑の櫻を御後じ

嬰女品

世官丞相供奉ありしかくもてさるる
茶茶平のうらふ

世の中小終く極のなうらまは

まのさく活いのともかま

と云つて天喜四年小櫻花暮殿新小
成く記をとくく夏清輔が袋中みよ
見くくろ諸越とて牡丹花王とんひて

さくく櫻を用ひざばもや詩人の歌詠も

多くに見えど千武陵が白櫻樹の詩よ

記得花開雪満枝和風和蝶帯花

移。只今花落遊蜂去空作主人惆

帳詩。

といつて萬首唐人絶句第八卷小出ら

唐の歐陽詹が歳前の櫻の未折と見く

山櫻先春發、紅葉滿霜枝。幽處竟誰見、芳心空自知。似分朝日照、疑畏晚風吹。欲問含彩意、恐驚輕薄兒。

とつり十二詩選小出り宋の王安石
山櫻の詩よ

山櫻抱石蔭松枝。並比餘花發、最

遅頼有春風、嫌寂寞吹香渡水報
久知

とつり今甫集第廿八巻小見り
さねら彼國やも曾く愛とる人なき
少もあつば是等の詩を吟どばよ
我国の櫻かくのぶと一諸越の櫻桃
様のまゝあつばとふ人もあつど然

あふばお叶を見らふ櫻桃の花の栴
糸の栴實のちも又はるうくとら
様のごとく但具時節あつらへり
さうらびが荆公が詩を全芳備祖の
櫻桃の下小糸あつらへるを見れば
少や楊廷秀が櫻桃の詩よ

櫻桃花祭満晴柯不晴嬌燒只晴

多落盡江梅餘半朵依然焚風韻合

還化

といつるハ栴の爰に雅小者より祝氏
が支文類聚の菓實の部は櫻桃と
いふ一と廷秀が詩ハ張固の下よ入
ぬもば花を實にす小珍重一ゆ
どとちるぐ一明の林子並鳴が多識篇よも

櫻桃うづものうづも外うづも小うづも別うづもはうづも櫻うづもぶうづもー

櫻桃うづものうづも外うづも小うづも別うづもはうづも櫻うづもぶうづもー

十一
五

櫻花辞

日あ年あああづあくあ花あとあ賞あもあはあハあ櫻ああり
いいあいついもい梅いはいさいくいくい花いといついひい一い返い
ナこ人こらこ係こらこ後こ櫻こをこ限こらこありこさこはこなこ
八や雲や御や抄やもや近や代やハや唯や花やとや讀やるやハや
櫻まぶまとまありま宣ま定まはま本ま朝ま花まのま長まありま

眼女まな口くち

十一
六

代々其の真の記録あまた也清輔が
真義おと紀貫之の歌よ

櫻山よりまはるる花あまのまはるる



あまのまはるる花あまのまはるる

と詠をらばもくもむ人あまのまはるる
俗の賞教是よのまはるるありけりぬ茲よ

怡頼齋松園先生櫻山あまのまはるる
實録はまのまはるる又見聞のまはるる
補益一ふは其門人甲敬え子授
あまのまはるる全部ありぬ將毎品花形
詳よ換ととるも艶色何ぞ筆業
よ及んいでや清少弼言松竹子小
松竹の櫻山吹と書一はるる

櫻口

あそとそるも見ん人此よ百信の更び
おも
お慮ひまんと尔云

芦田銀永



凡例

一 町廿六十餘州よ櫻樹がなるに取分
山城大和河内和泉攝津は五ヶ國
殊多し今け書する唯品類而已を
載くる名取の櫻の後編よ殊とまうの
あがど古今一品とぬとばる名所の
様ども悉し記と譬言ハ鎌倉倉の相谷

眼文口

十八

津國伊勢地方の櫻は諸處にも
 植廣まりて一品として世人を賞む
 故に奥小治りは又世より名高きも
 ちりて一品ありてははるばる津國
 金龍寺洛東地主櫻山西行櫻或は
 鞍馬の滝櫻の類也其外地名あり
 古物より名ありてはるばるあり

家櫻里雲深櫻滋櫻雲弁櫻を
 類奉て討へざらば引致と出し
 奥小治と
 花五瓣ありては早とつひ其餘
 皆重ありては俗呼んば早の
 餘と重瓣とつひ瓣多きは子辨と
 花辨多重と成虫とつひを万辨と

さくさく今け書もそ小集ど

一 月名異花同花異名一種二名二種

一名月名別種さくさく條下よ詳ふ記

一 種類よく一品あるは目録小具一名

附くそ返さくさく

一 開花の時候凡定まりありといふ

一 土地の寒く暖歳くの順敷ふさくさく

遅速あはれ強く弱くさくさく故小今

一 筆書の列を其花本基一般のその或は

花形の似たりさくさくその或は

一 譬言は江戸樓間楊子蛇さくさく

一 桐谷の愛ふさくさく桐谷の部のさく

一 属と

一 童蒙見分女さくさくめんがるる例の

櫻小花形図一糸小其所の
 文字以植る且毎口本支の頭小
 形以摸字以

櫻品

櫻品

怡顏齋松岡玄達先生撰

目錄

- 彼岸櫻 ひげんざくら 鞆 婆 重
- 糸櫻 いとざくら 大 小 芳野 千瓣
- 熊谷 くまがや ○ 波女櫻 なみづなざくら

目錄

櫻品

十一

○ 白ちび櫻

○ 慶この櫻

○ 芝ま山櫻一名 鷲の尾

○ 逆さうて手櫻

○ 帆な立たて櫻

○ 帆な掛かけ櫻

○ 駒こま鞍つるぎ系ぎ并な駒こま筋ぢん

○ 山櫻 紅 吉野
白 山桐谷

○ 小櫻

○ 白櫻

○ 聖ゆき山櫻

○ 一いち支し字

○ 薄うす墨すみ櫻

○ 桐きり谷や 一名 八重二重
鞍返

○ 江戸櫻 小 大

○ 法ほつ輪りん寺

○ 江戸法輪寺 一名 法善寺 泰山府君

○ 樓ろう間ま櫻

○ 海うみ棠どう櫻

櫻品

○千本櫻ちのぼの

○九重櫻くわんじゅう

○淺黃櫻あさぎ

○樺櫻くわん一名黃櫻

○樺櫻くわん一名白樺

○爪紅つまぐさの

○楊貴妃やうきひ

○有明櫻ありあけ重かさね草くさ

○手毬櫻てまり

○系括けいかく一名大手毬てまり

○提灯ていとう小大

○五所櫻ごしょ

○照君櫻ていしゅん

○香白櫻かぢ

○緋櫻ひざくら

○薩摩緋櫻さつまひざくら

○虎尾こび完紅べんこう

○泰山府君たいざんぷくじん

○真櫻ま

○外山櫻とやま

目錄

櫻品

〇三

柳品

柳品

○ 曉櫻あけぼの一名明星櫻めいせい

○ 普賢象ふけん

○ 犬櫻いぬ一名みづ上みづ天みづ瀧みづ

○ 明佳交櫻あけよし

○ 鳳來寺ほうらい

○ 鹽竈櫻しほがま

○ 名寫櫻なごま

○ 大膳櫻おほの

○ 伊勢櫻いせ

○ 奈良良櫻なら

○ 遊櫻あそび

○ 不斷櫻ふたぎ重かさね乾かほ一名若木櫻わかしき節會櫻せちあひ并な三度櫻さんど
十六日櫻じゅうろくにち

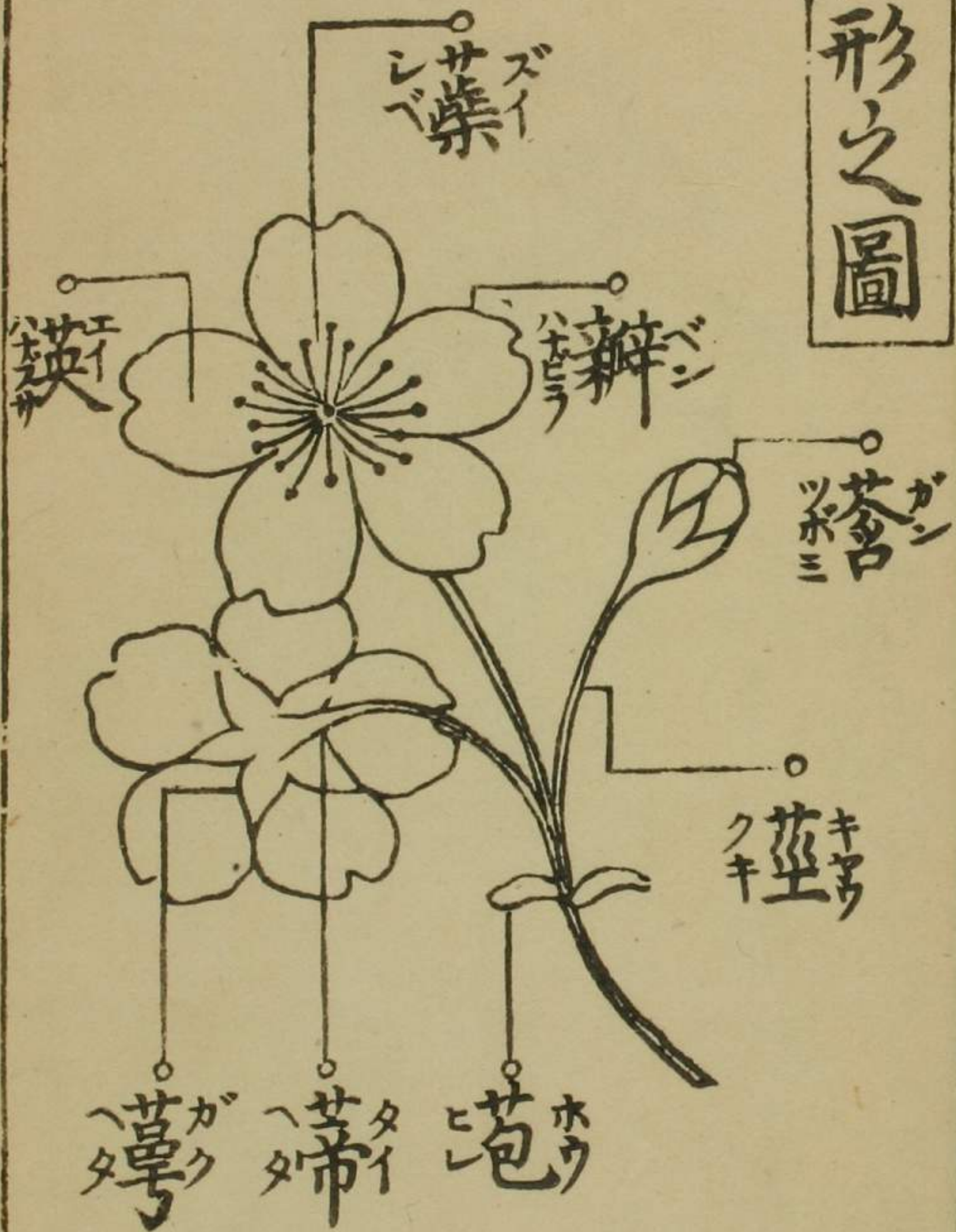
以上六十有九種

目錄

眼安口

ナロ

花形之圖



彼

眼女口

十五

柳

十五

柳

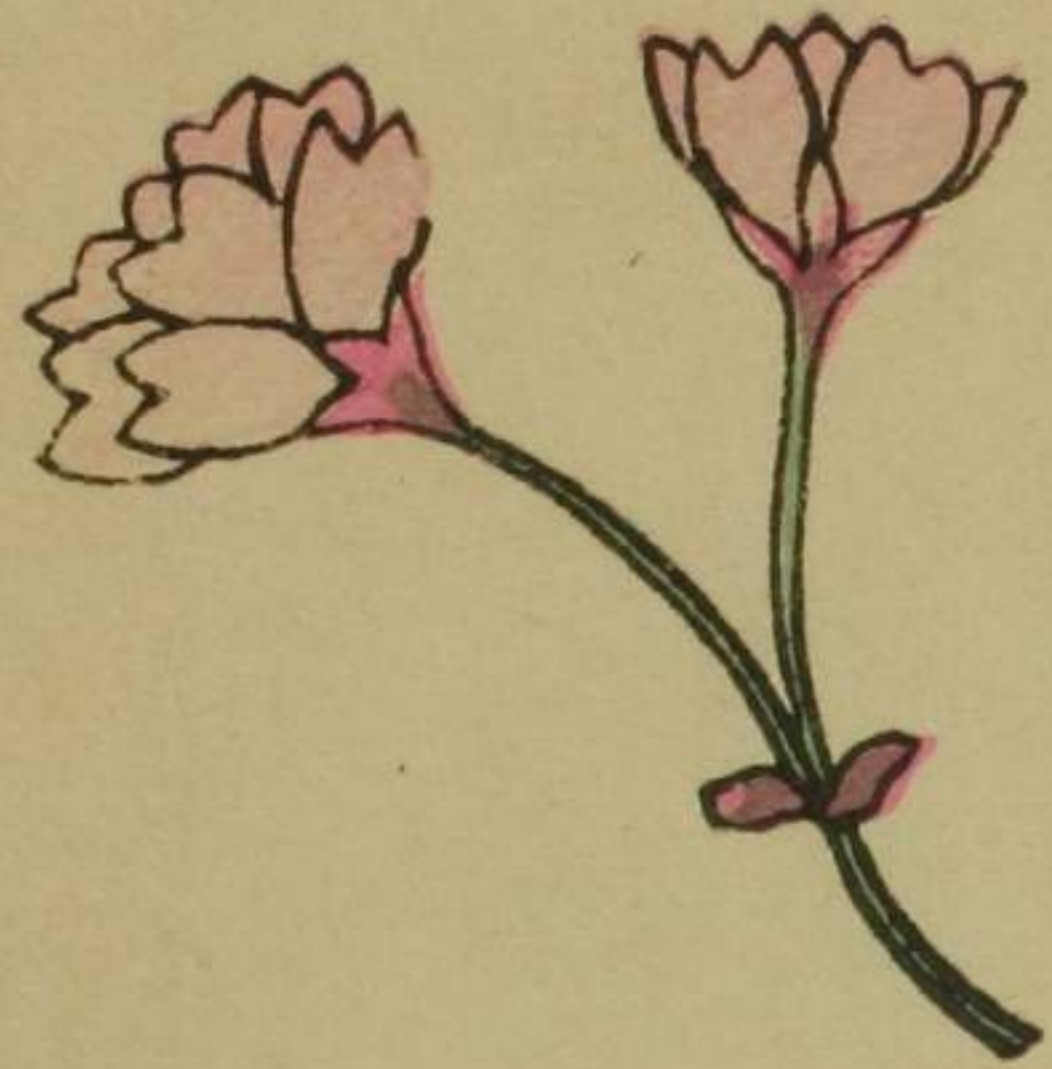
彼岸櫻 いざんざん



ササ

○怡顏齋曰同く半最
早し二月まきの節小
用く是則海棠の誇よ
のまほ取の尋子海棠
あらん枝の頭よ叢と
生ん地層枝葉のど
花は甚しむとく草也

波女彼岸 うねいざん



八重彼岸 やえいざん



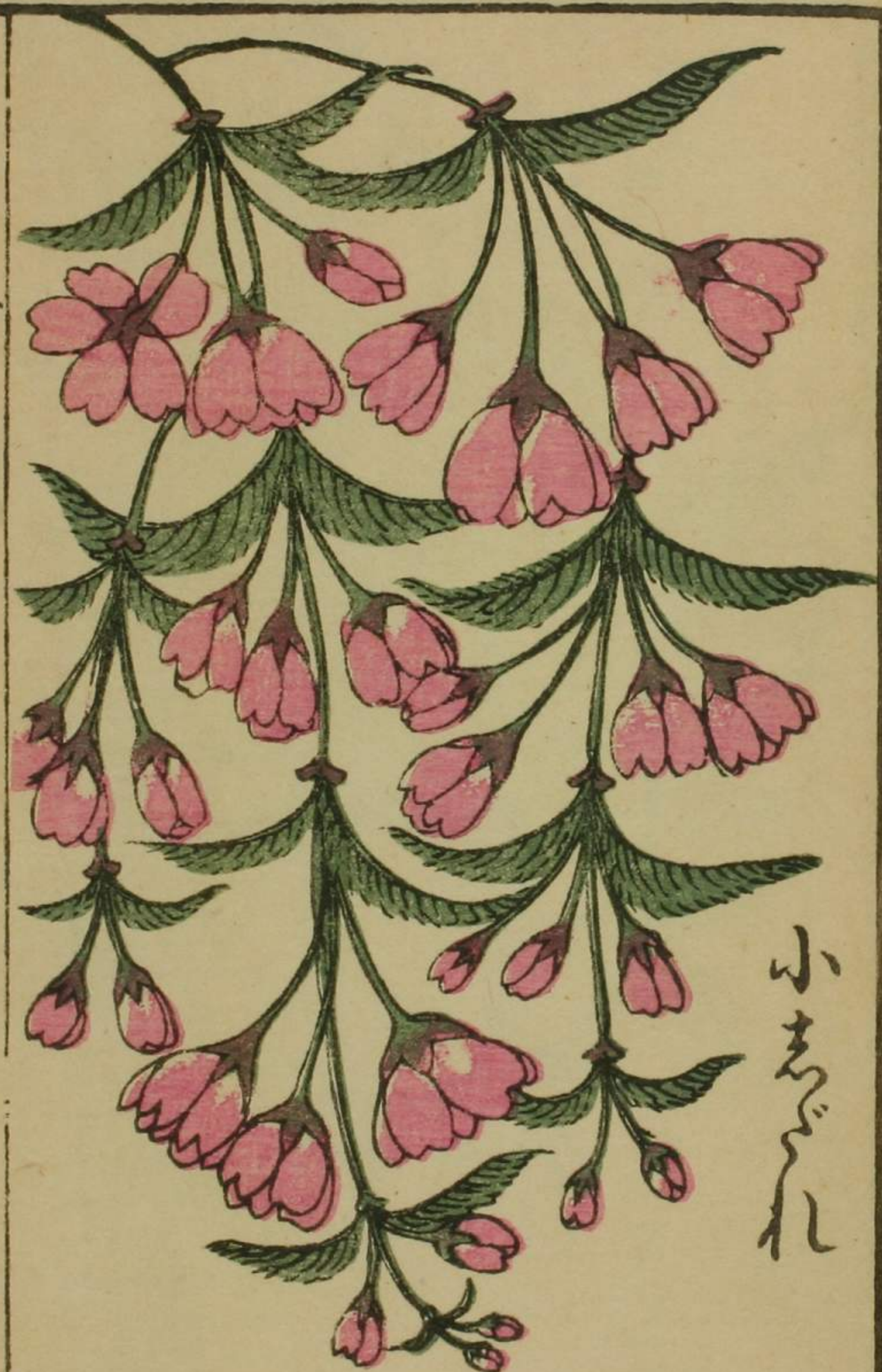
眼女

ササ

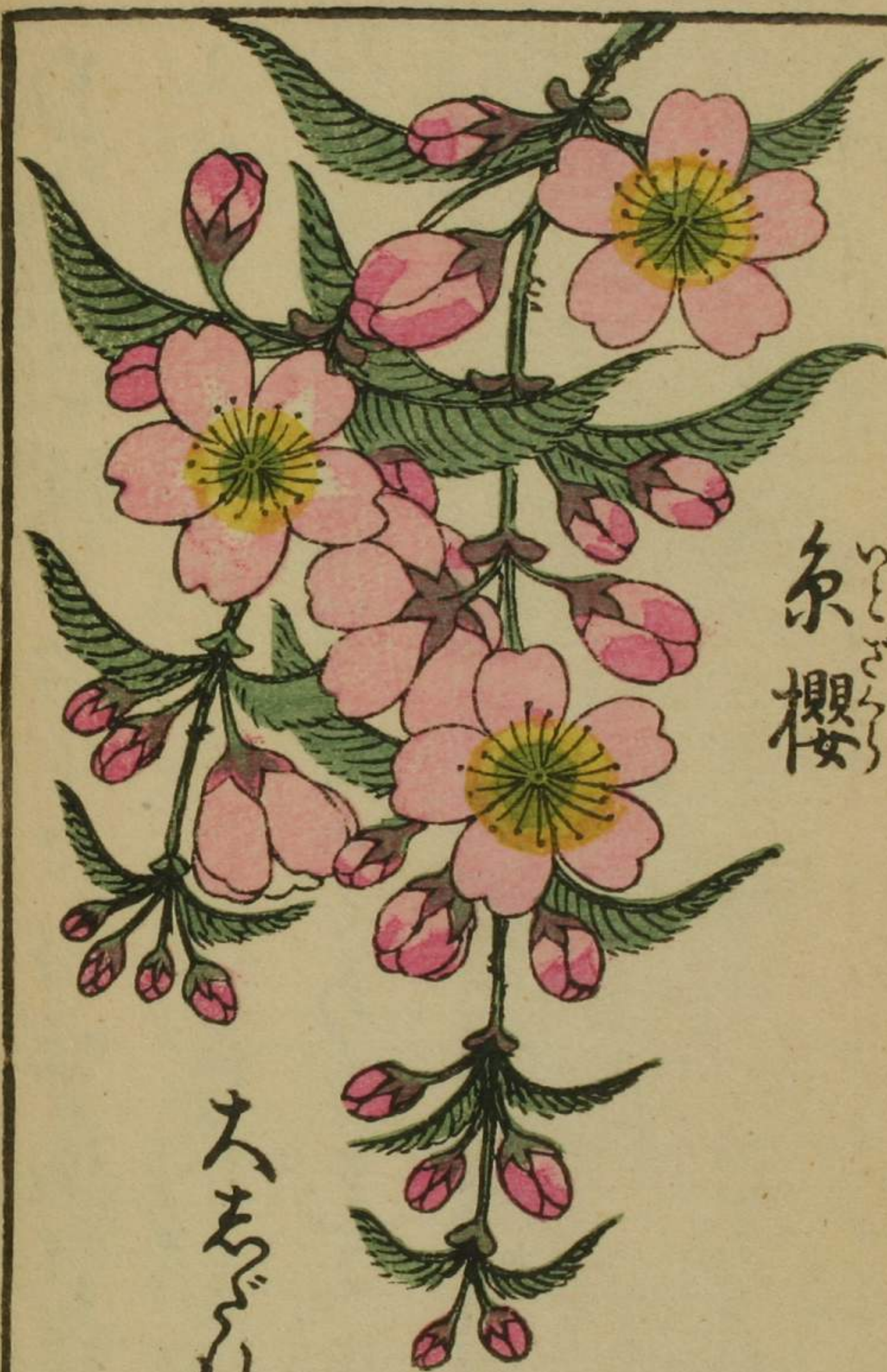
又波女なみづめ彼か存ぞんと八重やえの二種ふたしゆあり婆うば彼か存ぞんの
 系けいふちくして花はな用もちく父ちち落おちしたた花はな疎そ也
 八重やえ彼か存ぞんの重ちゆう瓣はんめめく父ちちををけけ草くさ瓣はんあり
 その花はな彼か存ぞん櫻おうくくりりふふりり二種ふたしゆあり
 又活い取と翁おきな櫻おう譜ふ小こ日ひ二月ふたつき彼か存ぞん小こひひく
 紫むらさちちくく花はな小こくく甚た用もちるる草くさあり
 若わ微ゐくく長ながくく花はな家いへ山やまどどとと若わ類るい齋さい云い

是これハ則すなは波女なみづめ彼か存ぞん也活い取と翁おきな唯ただ一種ひとしゆのことなり
 又貝かい原はら篤あつ信しん花はな譜ふ曰い彼か存ぞん櫻おう本ほん名な小こ櫻おう
 信しんよよ是これ以もて彼か存ぞん櫻おうととあり是これ又また非ひ也
 小櫻こおうハ山櫻やまおうの一種ひとしゆ也見み櫻おうとと彼か存ぞん櫻おうと
 日本にっぽん也小こと見みと曰い香かめめく別べつ種しゆ也但ただ
 小こ少せう作さくるる小こ櫻おう也見み小こ作さくるる見み様さまと吟ぎんぶ

照女
品



小志ざれ



系
櫻

大志ざれ

樹
品

十七

眼女
口



せん
ひょう
系
桜

十九

木
口



芳
野
去
枝

十
ハ

柳品

十

○怡頼齋曰彼名櫻と一時小用あり又
 雲枝櫻ともいふ蓋花園小地接とつみ和
 あり花うつりてく薄色あり津國
 池田本の道の名よりある色白とあり
 系地よりく老木よまきば富地の系
 櫻と曰幸也彼名接と花全は但枝梗柔軟
 鳥衣くゆく柳の枝のどく

夫木集

後頼

おもむき事ん志り接の枝がそこ

柳のゆふむきをまきよき利

住者黃藤の唐僧小訪回せし小雲枝
 海棠とつり接雲枝海棠の名海棠の
 譜よ出洛陽花本記小雲絲海棠一石
 軟條とつり今の系接の形状よ合せり

嬰口

三

まろれども二如亭群芳譜垂糸海棠の
 下小西有海棠以出く枝茎や堅く
 いろ花まじり西有海棠へ今の櫻も似
 たり垂糸とりかも枝の垂糸小花苞の
 中より多枝吐出く其さま小花の
 垂糸をとりかき見入りまろれども垂糸は
 今の櫻の垂糸をみり独糸櫻とて小

あは唐僧偶糸櫻をけりく垂糸といひ
 たり習くさつせむは也糸櫻へ軟條ありて
 垂糸もあはは振汝南圃史棠棣の條に
 垂糸海棠小棣棠花の似るはとあり射の
 今の櫻の中の江戸桐谷伴振が垂糸は指と
 幸分明也畢竟今の様と海棠の一種
 みり様もあはは櫻へ即櫻柳あり今の

中より梅と云ふと類自別也又按云系
 海棠二種あり日名別也一種ハ古来
 補とる取の名様也一種ハ今の櫻是なり按
 行厨集花本門ハ云系海棠の條云
 吐系向下花ハ似地棠花と云今ハの極
 皆茎長く下へり吐系ハ枝の末より
 事ハありハ海棠譜及園接法ハ小ハ行

云系海棠と云はるものハ今の系櫻なり
 行厨集よハハ諸の極の事と云はる
 分明也近世ハ徳志覚印ハ唐僧也
 云系海棠ハ諸櫻の通称也重ハ云
 系ハ八重櫻の事也是行厨集の説と
 合せり敬義の櫻辯ハ誤く櫻桃ハ
 重く日ハ平の極とせり櫻ハすかとも櫻桃ハ

同

揚廷秀

無波可照底須窺與柙爭嬌也學
垂破曉驟晴天有意坐香新曉一
鉤糸

○活所翁花譜曰具花波女柙と一時よ
同く枝柙のとし花波女柙のとし彼女
柙を其まゝとく糸柙を接則彼女と

日神也

○怡然齋又曰是花花園せん子せん辨糸柙と
つよのありそ軟條海棠也せん元來せん空枝と
そ糸糸せん門せん有せんある故世人せんそ小惑せん既貝原
篤信せんをせんとせん空糸せん柙せんとせんつせんせせんい柙也

○新永曰又古野志せんとせんのあり花
中せん輪せんあり八重せんありせん糸せんもせんませんもせん常せんの

標品

山桜やまざくらふ等ひとしく志こころどゆゆ幸さいわい多おほく多おほく標しるしのの花はな
又また大おほく志こころどれれ小こ志こころどれれもも又また枝えだままいい全ぜん株けのの
本もとここいい小こ志こころどれれのの枝えだ柔なやまみみ柳やなぎののこことと
細こまくく志こころ多おほくややふふ志こころ多おほくもものの花はな

熊くま公ぐん谷ざう櫻やう



熊

熊公谷

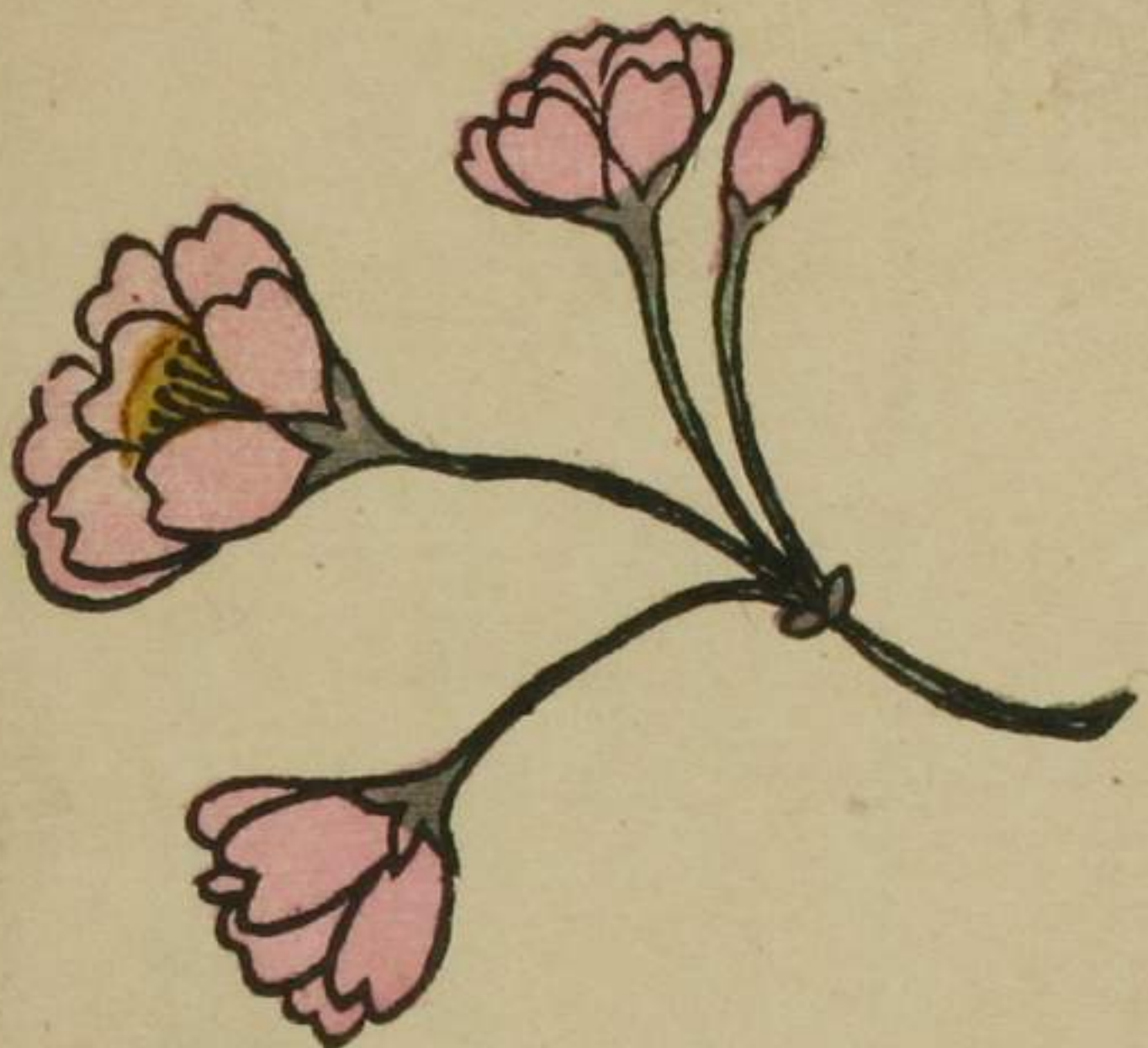
○怡い顔げん齋さい日に二月にげつ彼か
花はな系けい桜やうのの後のち小こ咲さき花はな
瓣はなびら尖とがありあり盛さかととありあり
小こ菊きくのの花はな似にくく志こころ多おほく
かかいい赤あかももありありくく志こころ多おほく
かかいい白しろももありありくく志こころ多おほく
熊くま公ぐん谷ざう櫻やう

熊公谷

然穴は眞實と平公長者取と一の谷の魁
 せし後をさうとく名甘く又云或人のいそく
 千辨のこのあり喜梅花小似らとぞぞそ
 然に言あわだ別はは花園小よ
 楊を妃あり細櫻は似と小し又草辨
 大輪のく色お暈は帯し芝山と云
 一の小似らばを熊穴中とよそ又那也

是の迂多様とらふもの
 ○活取森日櫻花の魁あり二月花紙
 用く彼者様子先ざらと花小して重
 色微し赤しと也

婆櫻うぐんざう



○怡顏齋曰彼者櫻と
一般也但紫あまき氏あは
くち付あちとあとあ和訓通あを
活所あは櫻護あ見あへあり

○活所あは櫻護あ曰あは短
花あ密あくあ貼あああく
たあは波女あのあまあのあ

ぎあありあくあ右あ付ありあ也あ花あ波あ女あ様あよあ後あまあそあてあてあて
○純永曰花あ開あくあ幸あ 柯あ谷ありあ連あくあ紙あ様あ
江戸様あとあ同時あ小あ吹あ但あ彼あ者あ様あのあ條あよあ演あら
婆あ波あ者あとあけあ波あ女あ様あへあ別あおあ也

児櫻

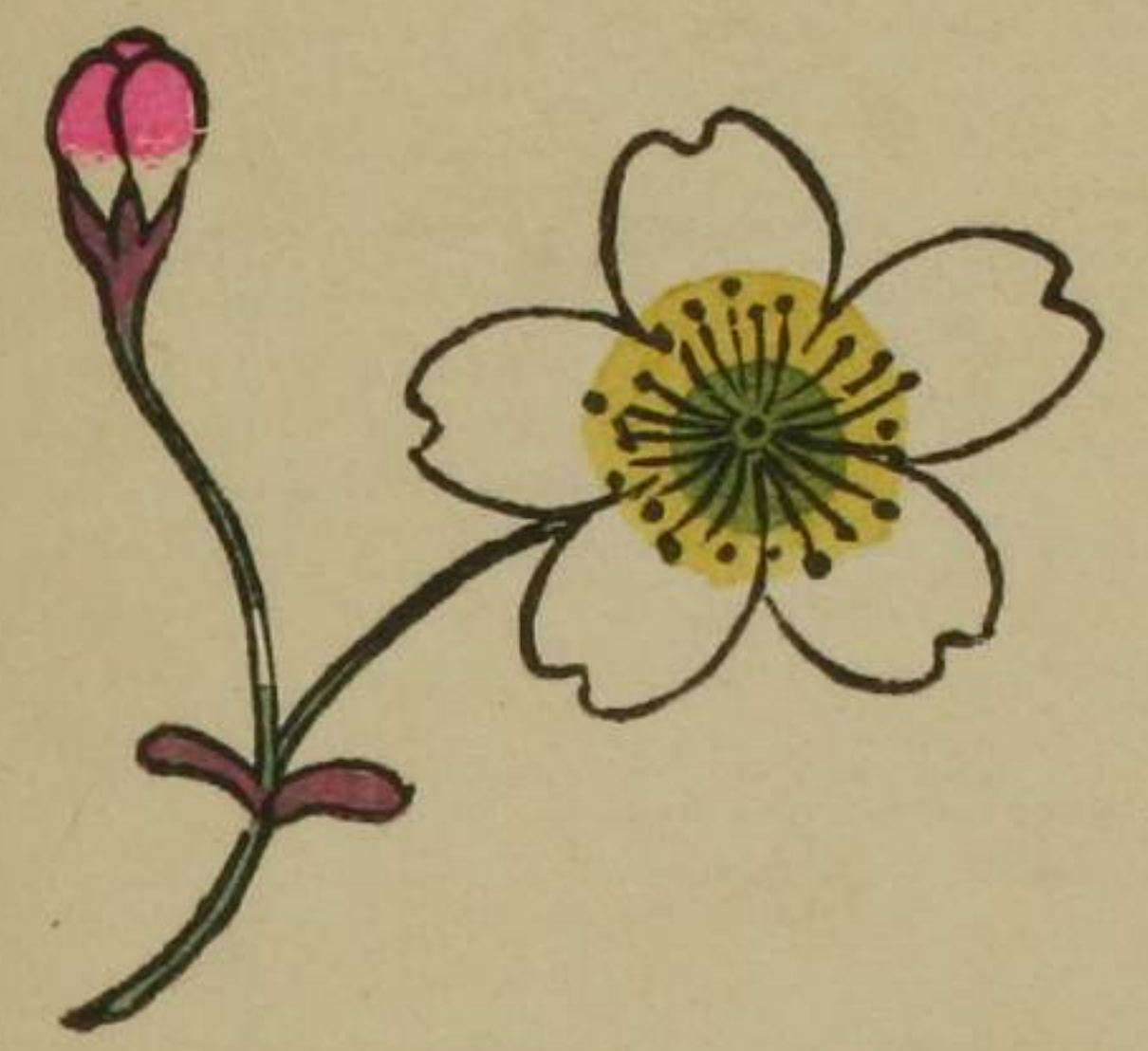


○怡顏齋曰然天竺^{くわんぐわん}は
 重^{くわんぐわん}落^{くわんぐわん}一^{くわんぐわん}絶^{くわんぐわん}合^{くわんぐわん}花^{くわんぐわん}瓣^{くわんぐわん}外^{くわんぐわん}
 みる^{くわんぐわん}同^{くわんぐわん}く^{くわんぐわん}児^{くわんぐわん}櫻^{くわんぐわん}の^{くわんぐわん}内^{くわんぐわん}抱^{くわんぐわん}
 わ^{くわんぐわん}り^{くわんぐわん}草^{くわんぐわん}の^{くわんぐわん}小^{くわんぐわん}輪^{くわんぐわん}白^{くわんぐわん}色^{くわんぐわん}の^{くわんぐわん}
 花^{くわんぐわん}疎^{くわんぐわん}小^{くわんぐわん}ほ^{くわんぐわん}く^{くわんぐわん}の^{くわんぐわん}洛^{くわんぐわん}西^{くわんぐわん}
 仁^{くわんぐわん}和^{くわんぐわん}寺^{くわんぐわん}二^{くわんぐわん}王^{くわんぐわん}門^{くわんぐわん}下^{くわんぐわん}東^{くわんぐわん}側^{くわんぐわん}に
 一^{くわんぐわん}株^{くわんぐわん}あり^{くわんぐわん}花^{くわんぐわん}小^{くわんぐわん}く^{くわんぐわん}一^{くわんぐわん}株^{くわんぐわん}

本^{くわんぐわん}子^{くわんぐわん}花^{くわんぐわん}の^{くわんぐわん}心^{くわんぐわん}より^{くわんぐわん}又^{くわんぐわん}ふ^{くわんぐわん}れ^{くわんぐわん}ま^{くわんぐわん}似^{くわんぐわん}く^{くわんぐわん}草^{くわんぐわん}薺^{くわんぐわん}の^{くわんぐわん}
 白^{くわんぐわん}色^{くわんぐわん}中^{くわんぐわん}輪^{くわんぐわん}なる^{くわんぐわん}もの^{くわんぐわん}瓜^{くわんぐわん}敷^{くわんぐわん}櫻^{くわんぐわん}と^{くわんぐわん}ふ

標品

このごう
殿櫻



○怡顏齋曰兒様ちご似く
中輪ちゅうりんももよよの也なり即すなはち兒櫻
のい類い也なり花はな瓣はなびら早はやのは白しろ
色いろ五ご瓣はなびらのいももの也なり兒様ちご似に
小輪せうりん殿櫻とのざくらのちゅうりん中輪ちゅうりんのさ芝山さしやま
のいふい同おなくく則すなはち芝山さしやまのあ後あとこ
芝山さしやまのお大輪だいりん也なり

芝



まじやまごう
芝山櫻

○怡顏齋曰いげんさい早はや瓣はなびら大輪だいりん
白色しろいろあり殿櫻とのざくらのい五ご瓣はなびら也なり
芝山さしやまのい六む瓣はなびら也なり芝山さしやまのい六む瓣はなびら也なり
分わ花はな園えんのい早はや瓣はなびら
大輪だいりん白色しろいろのい尾お尾お
といのい芝山さしやまのい相あ似にくく花はな
芝山さしやまのい相あ似にくく花はな

標品

標品

報うらくく所ところにに詔みこと問とききふふ芝しば山やま就す多た尾び
 全ま一つ扣ひ二ふた多た山やま是こゝ是こゝありありととここけけ樹き芝しば之の山やま家け
 ありあり物もの之の色いろとと又また芝しば山やま小こ多たくく生なむむとと云いふふ
 但た八はち重じゆうとともも一いつままととししびびととししのの笑わらかかりり
 ありあり紫むらさふふ物ものとと紫むらさふふ物ものおおくく花はなのの笑わらかかりり

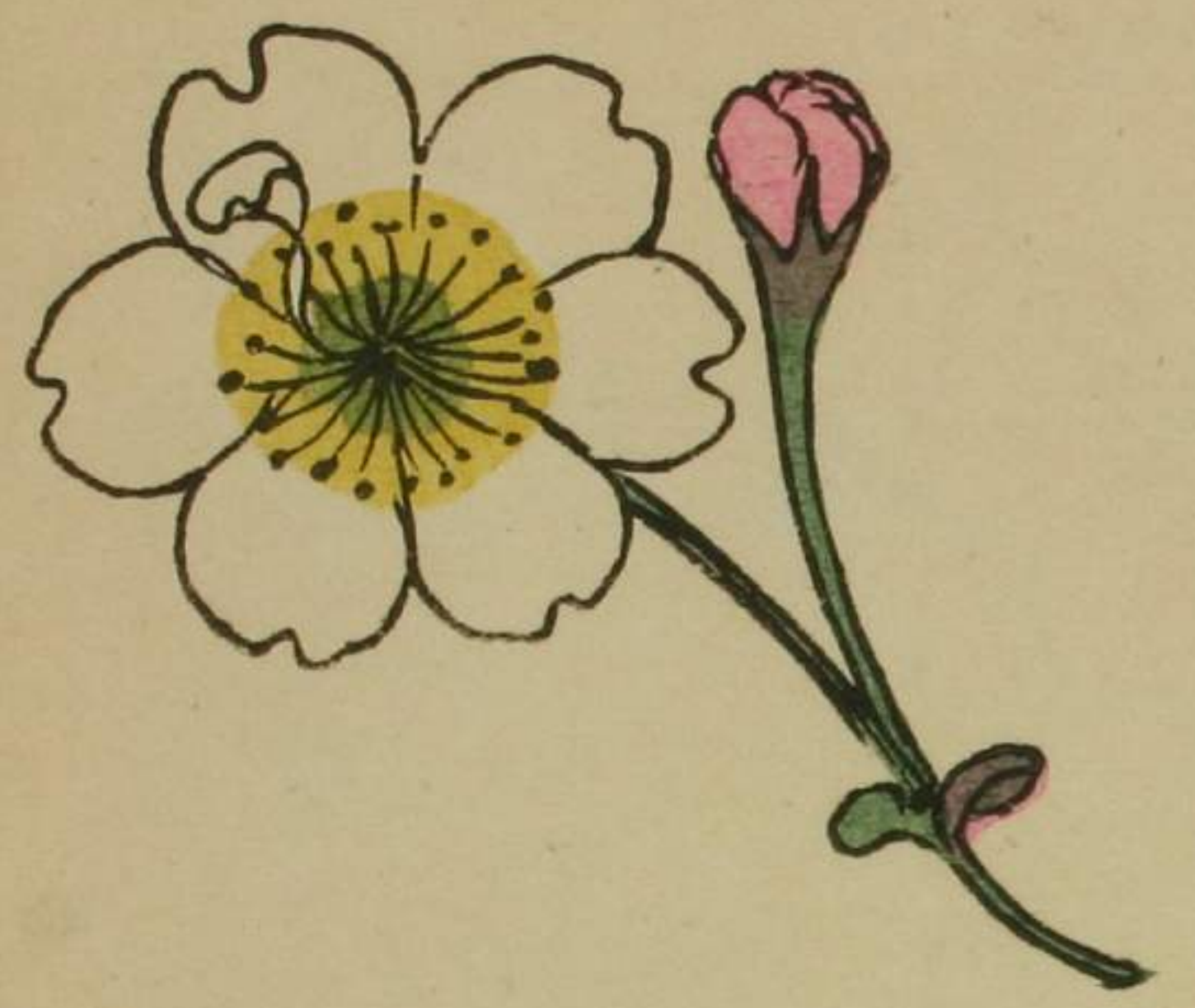
逆子櫻



○怡い顏げん齋さい曰い逆さか子こ櫻いハ
 芝しば山やまとと同どう種しゆ也なり早はや瓣はなありあり
 花はな形かたち大おおきき全ぜん芝しば山やま小こ月つき
 但た碎くだととありあり以もつ異いととこことと
 芝しば山やまのの色いろ白しろくく逆さか子このの色いろ
 赤あかくく逆さかくく月つきのの色いろ白しろくく芝しば
 山やまとと月つき遠とほくく遠とほくく遠とほくく遠とほくく逆さか子このの色いろ

破とひさいふり芝し花はなもろくもろく分わりもろく又また六む瓣はなのは一い行ぎやう狂きやうひありく帆かをえらふこきもも坂さかの帆帆かをえらふもも惑まどひ易易やすしきならども帆かをえらふ白しろ之の帆かをえらふ送おく子この帆帆かをえらふ芝し之の山やま帆かをえらふ送おく子この帆帆かをえらふ只ただ六む瓣はなのは一い瓣はなの帆帆かをえらふゆゆ人ひと信しんよよけけ一い口くち帆かをえらふ送おく子こととゆゆ

帆立櫻

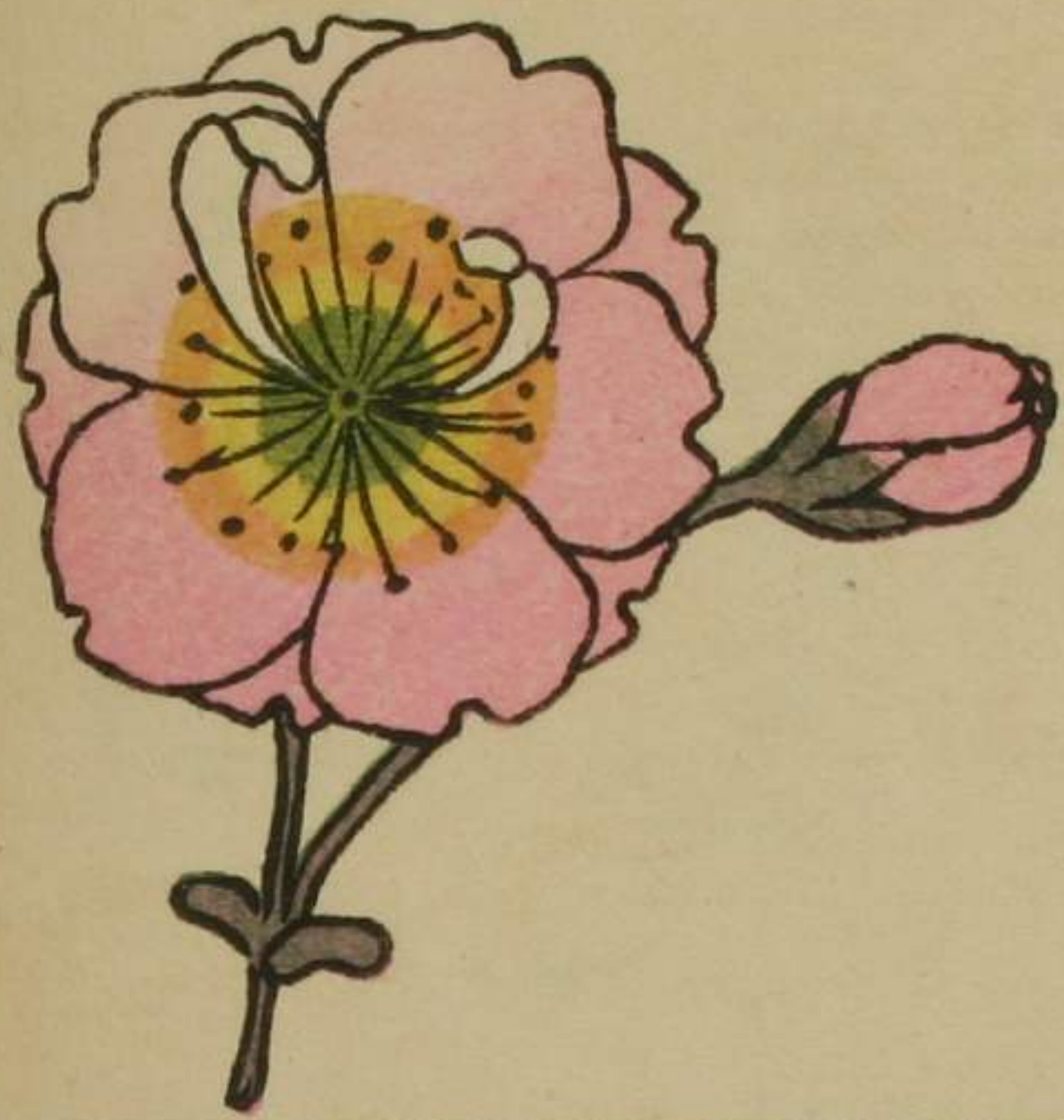


帆立・帆
親女

○怡い顔げん齋さい曰い帆かをえらふ芝し之の山やま
 と月つき積つみをえらふ六む瓣はな又また中ちゆうの帆帆かをえらふ
 号ごう送おく子ことと惑まどひ易易やすしきならども帆かをえらふ白しろ之の山やま
 帆かをえらふ別べつ種しゆ也なり

帆立

帆掛櫻



○怡顏齋曰色白くわ
赤く中物とて重瓣也
内小泳葩二行帆掛
ごん也故小号一名旗櫻
と云

○純永曰古老云け花と
旗櫻と六住昔八幡太良

義家眞品伝伐の時常別久後郡小旗
を之を世のひり一株櫻生し
故旗櫻と号あり今小其所あり

駒鞍子櫻 こまつきざくら



○怡顔齋曰洛陽宮
 境内小駒田櫻とて重瓣
 ○元永曰小撮とてこまつきの繋
 櫻之中輪とて又大白花
 瓣いろあつ廣く厚くくさや花の
 心わかかゝぬも駒田駒鞍子
 日かかゝ一物也

山櫻 やまざくら



○怡顔齋曰やまざくら山中小
 多しあつ一單瓣ありひとへ白色
 早く開くひらこの通つうで山櫻と
 呼ぶよ其その中なか小品類しんぷん又また花
 色いろ色いろぬ白しろの二種ふたあり
 又また花はな疎すか小こほくほくそのあり
 ままてて寂さむ少すくくくほほくくものもものあり

大輪もろく少輪もろく葉ふし出神り時まろくして
 あつさふ葉はもろく又吉野とりりあつさのもろく
 葉より葉ふよりくまろく一葉四葉を
 かさなり貼る葉を山相谷とりり大抵山
 櫻のた疎也

夫木集

仲正

山楳ささしきろぬる人をもふ
 所はうさはのうさうそは

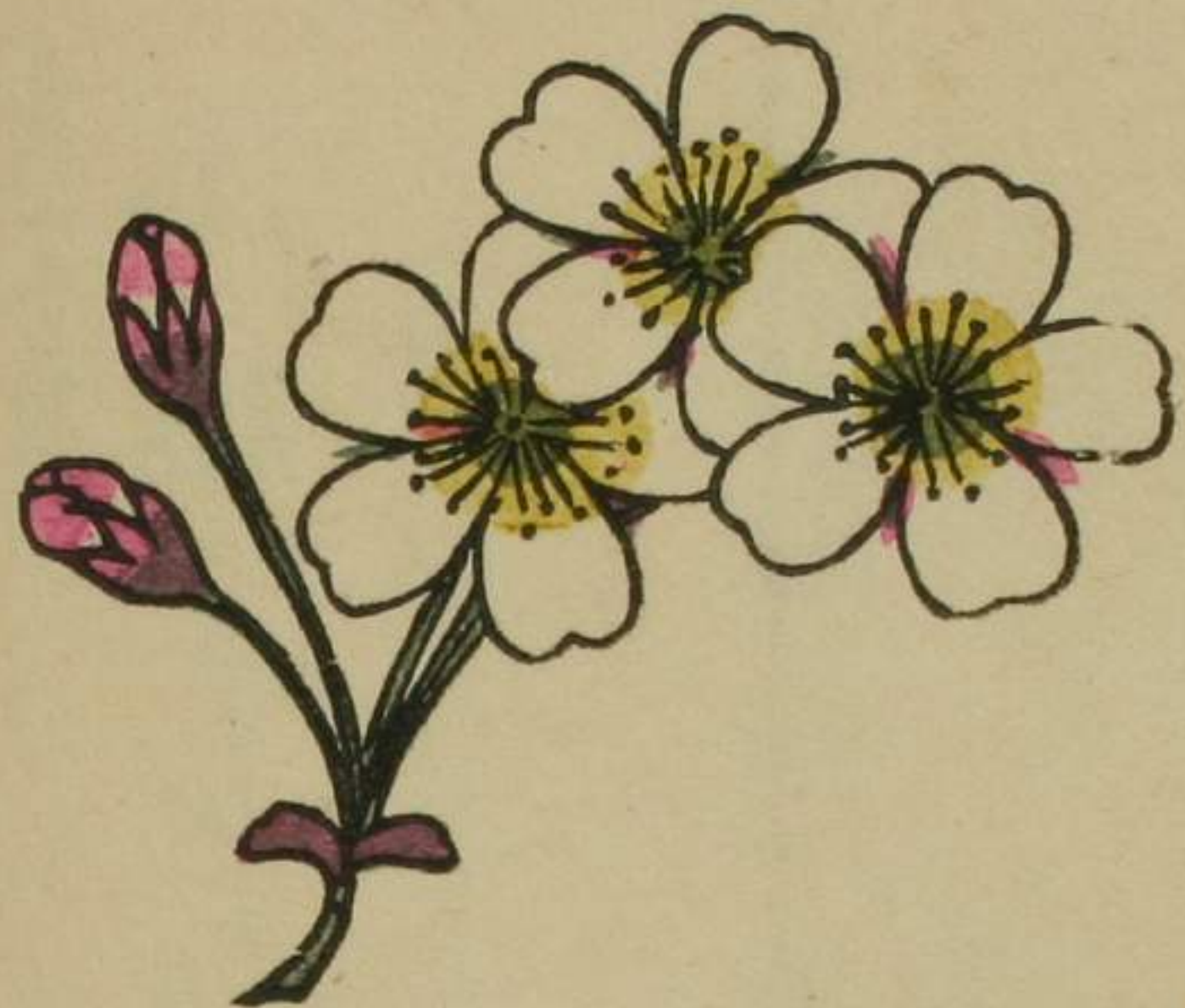
○活所翁曰一重少く色白く茎短く
 花疎密の二種あり其実ゆるおの大輪
 ありと相谷小似たり又楳櫻と名付く

小

観世品

四十三

小櫻こざくら



○怡顔齋曰山櫻の二種也
 花薄らありハ主彼者
 小多し〜花密く〜
 鏡よ小櫻威といふもの
 け花色ふ多あり〜
 くら也

標品

四十四

白櫻しろざくら



○能永曰山櫻よ何々
 色薄ら白あり〜
 瓣廣く丸〜
 花也雪山櫻と
 白〜花野山櫻と
 子〜あるべし

白・雪

標品

四十五

標品

雪山櫻 ゆきやまざくら



○ 徳永曰中輪ちゅうりんのりく白
色らるる支雪のこし
但し花形けいけい波なみ如ごと櫻ざくら小こ今
あふど得あふどくハ波なみ如ごとと
まがうもの也

四十五

一文字 いちぶんじ



○ 怡顔齋曰此花白色
山櫻やまざくらとて大輪也おほりん草辨くさべん
ゆくと及およも抱かかもふハ花
同ひとく花辨けいべん平ひら分ぶんり故ゆハ
一文字いちぶんじとりゆ也

一・薄

嬰品

四十六

薄墨櫻



○純永曰白梅小似く
花小く草薺めて薺
細く又白莖地かきも小
ましく薄墨のどし
又伴藤園和守郡信基
村西方まの庭小一株ある
よけは玉のく小圃はる小

花の早少く薄墨のどし
大薺めく花さき尖ありと云これ同右
別種あり

標品

四五七

桐 きりぎりす
谷 や



○怡顔齋曰一名八重一重一名車返花中第一品也一枝の中八重と一重と雜り咲く其中八重多く一重は少く一重は少く色は淡く一重は八重と相谷の八重一重相雜えけは鎌倉相谷より出故名付式古老にけ花を一人の八重ありと云又一人の二重ありと云多條又とびと二人車返返規の一本八重一重

嬰品

四五八

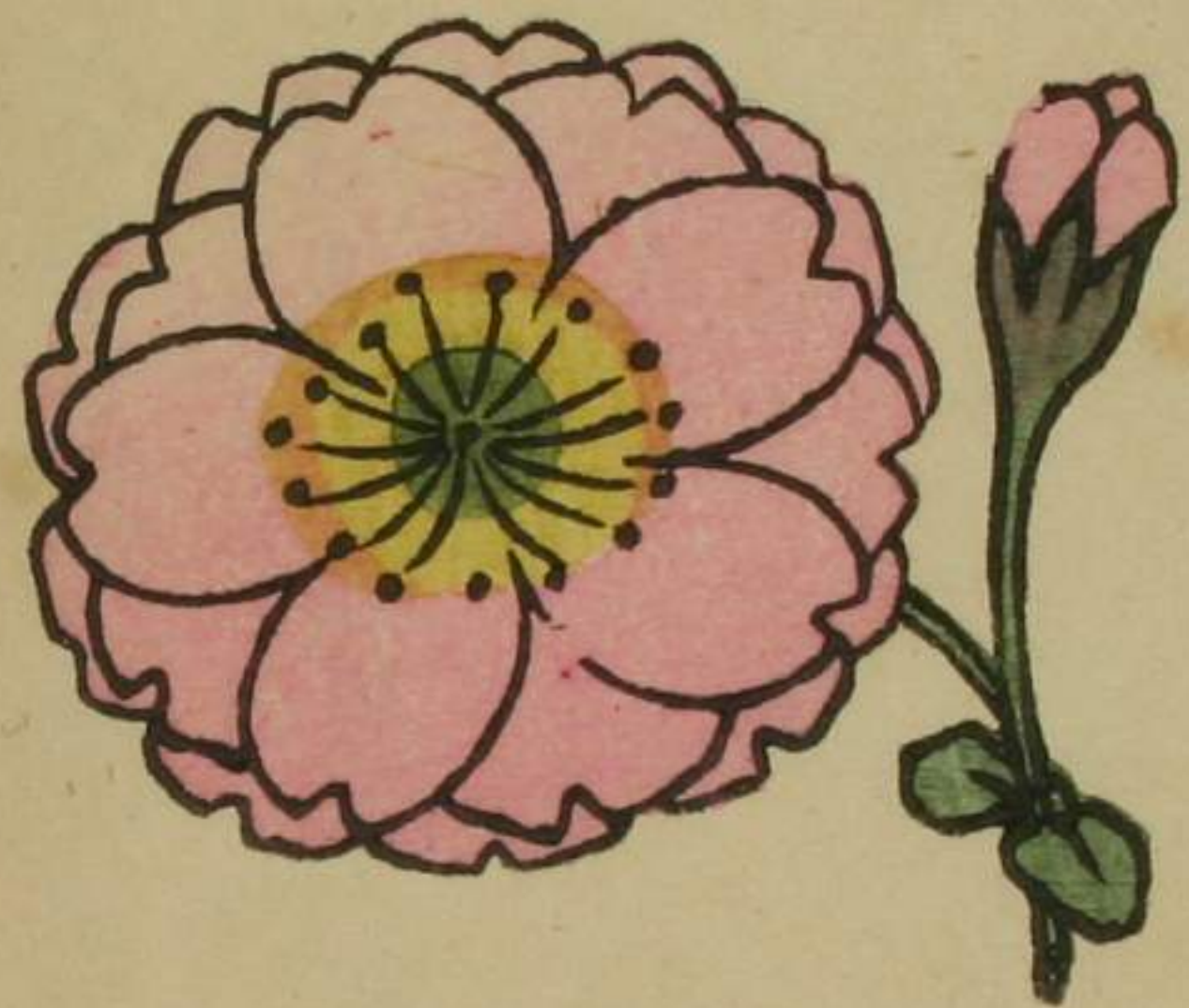
更^まり後^あ文^ぶ口^く入^い所^{しよ}支^し義^ぎも令^{れい}ぬの^の車^{くるま}
 返^へと号^{ごう}櫻^{おう}中^{ちゆう}第^{だい}一^{いつ}也^{なり}に戸^こ櫻^{おう}もけ相^あ右^{みぎ}の^の爰^{こゝ}
 ありされど相^あ右^{みぎ}の^の落^お花^{はな}燈^{とう}念^{ねん}もく^{もく}爰^{こゝ}の^の
 心^{こゝろ}の^のく^くに戸^この^の花^{はな}中^{ちゆう}糸^{いと}ど^どあ^あら^らば枝^えお
 志^しを^をほ^ほく^く也^{なり}も相^あ右^{みぎ}の^の勝^かま^まと^とら^らば活^{くわ}取^と
 も栞^しの^の第^{だい}一^{いつ}め^めと^と白^{はく}也^{なり}微^ゐく^くあ^あら^らば^は且^{かつ}取^と
 長^{なが}し^しとい^いつ^つら^ら又^{また}泉^{いん}品^{しん}埤^{へい}慈^じ恩^{おん}の^の地^ち内^{ない}

車^{くるま}返^へと^とい^いつ^つら^ら栞^しあり^りま^まの^の品^{しん}あり^り

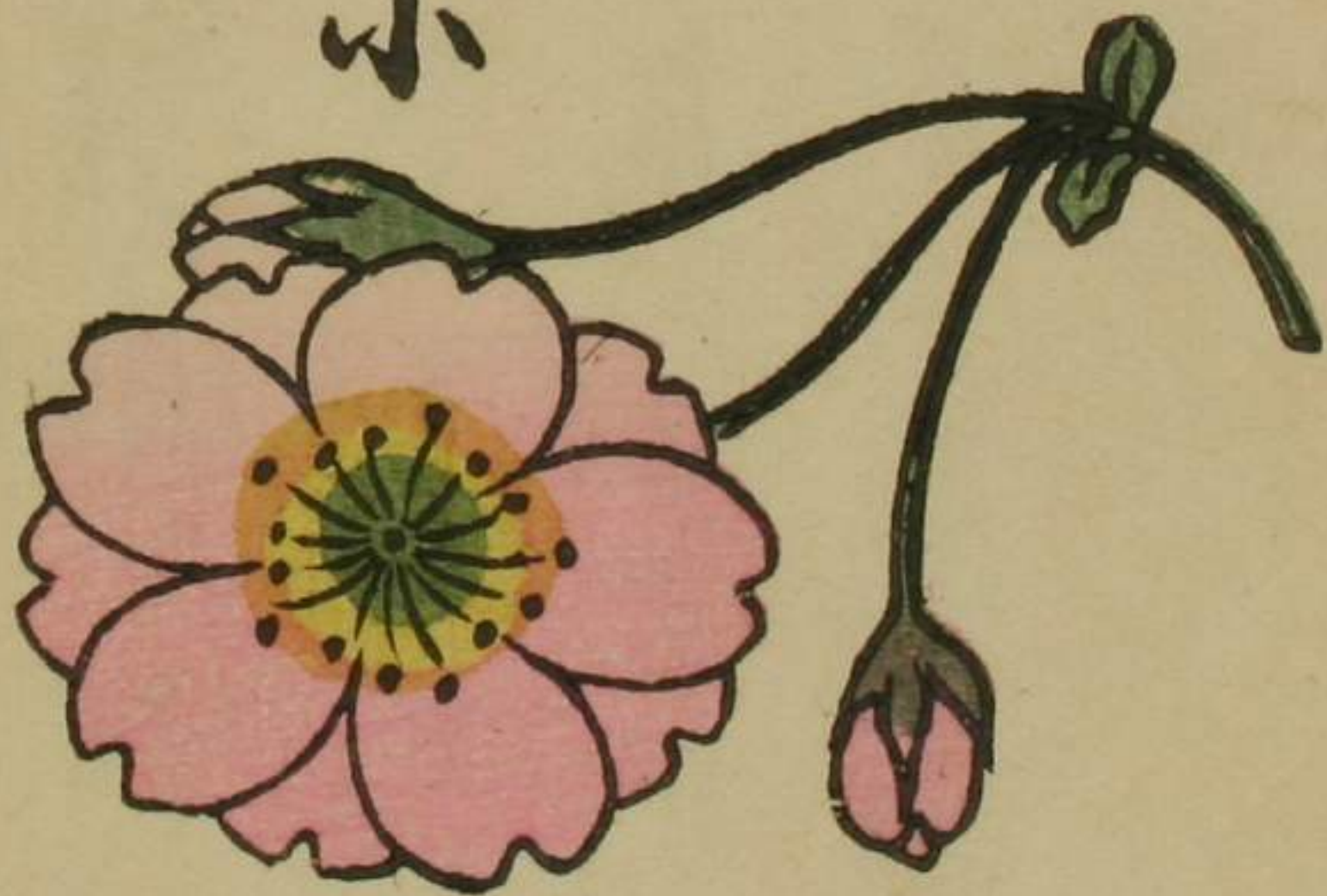
○此^{こゝ}永^{なが}日^ひ津^つ國^{くに}藍^{あい}村^{むら}とい^い所^{ところ}の^の田^たの中^{ちゆう}小^{せう}
 丈^{ぢやう}木^{ぼく}一^{いつ}株^{くわ}も^も花^{はな}相^あ右^{みぎ}の^の八^{はち}重^{じゆう}也^{なり}年^{ねん}毎^{まい}小^{せう}一^{いつ}
 重^{じゆう}げ^げ減^{げん}と^とく^く咲^さ八^{はち}年^{ねん}目^め毎^{まい}一^{いつ}重^{じゆう}あり^り
 九^く年^{ねん}目^め毎^{まい}一^{いつ}重^{じゆう}の^の八^{はち}重^{じゆう}と^とぬ^ぬも^も又^{また}八^{はち}重^{じゆう}
 一^{いつ}重^{じゆう}とい^いつ^つく^く種^{しゆ}類^{るい}あり^り日^ひ名^な別^{べつ}あり^り也^{なり}

つどざら
戸櫻

大



小



○惟い静じやう齋さい曰い重や瓣はなみみくく茎くさ長ながくく央あ葉はも
 花はな桐とう谷やのの八はち重じゆうみみくく則すなは桐とう谷やのの変へん化くわんんは
 濃のうかかままいい桐とう谷やよりより薄うすくく成なりままるるくく
 花はな枝えだもも志しががここ付つ也なり全ぜん新しんのの花はな枝えだ
 花はなのの中ちゆうのの田でん貴きあるあるものもの也なりひひくく夏なつ
 花はな桐とう谷やのの後のちよりより也なり又また大だい江え戸とと
 花はな法ほう輪りんのの茎くさののここりりままりり試しみ

標品

心を標^めし^てし^るの^まに^て答^{こた}の^時ち
を^あら^わし^める^べし^きに^あら^わす^べし^きに^あら^わす^べし^き

